上総国分寺殺人事件

2023 年 1 月 15 日
土井湖南

私の名前・土井湖南は古風な響きのする名前である。父親がシャーロック・ホームズの熱烈なフアンで、作者のコナン・ドイルをもじって名を湖南と付けたのである。子供の頃は古風な響きのする名前をよくいじられ、いやな思いをしたものだが、還暦を迎えた今はとても気に入っている。私は工学系の大学を卒業して、技術系の会社勤めを終えた後、趣味の遺跡巡りをして、それを脳活のために記事にしてホームページに掲載している。

若いころから古代遺跡に興味あり、資料を調べ、また巡っていた。市原の遺跡群にも興味が湧き、ここ 10 年ほど毎年のように訪れていた。市原市の埋蔵文化財調査センター主催の遺跡講座（埋文講座）にも参加したことがある。地元の国府探検隊のボランテイア組織があり、何度か遺跡巡りの案内をしてもらったこともある。

この秋に市原市の歴史博物館がオープンする。市内の遺跡の発掘物が展示されるし、新たな遺跡情報も期待できるので早速に訪れるつもりだ。

そのオープンに先立ち、遺跡をもう一度巡ろうと、2022 年の 7 月 18 日、いつものように車で千葉県市原市の国分寺台遺跡に向かう。

国分寺台遺跡に関しては市原市の資料に
【大国上総国の中心地として栄えた国分寺台エリア。東京湾と養老川に面したこの地は、原始古代から各地の文物や文化が集まる、房総半島の玄関口でした。全国に誇る縄文時代から古墳時代にかけての歴史遺産、また奈良時代や平安時代の遺跡が数多く残る国分寺台は、今もなお輝きを放ちます。】とあり、また七重塔の資料に、【上総国分寺の七重塔は現存していないが、礎石が当時のまま残されています。その位置から、初重で一辺 36 尺（約 11 メートル）あったと推定できます。国分寺としては最大級で、畿内の官寺に匹敵、あるいは上回る大きさでした。計算によれば、高さ 60mを超える超高層建築だったようです。】とあるが、これらはほとんど頭の中に入っている。

国分寺台には貝塚、古墳群、国分僧寺跡、国分尼寺跡、神社があり、何度巡っても飽きない。国府所在地は未発見のままであるが、国府探しのロマンもある。

私が最も好きな七重塔に関してだが、日本では七重塔は現存していない。現存する五重塔のうち、最大の高さは東寺の五重塔で、その高さは 54.8 メートルだが、上総国分寺の七重塔はそれより高かったのだ。想像するだけでも壮観である。当時の人々はさぞかし驚いたことであろう。国分寺と七重塔はそれまでの古墳に代わる政権のシンボルとして、人民に権威を誇示するのに十分だっただろう

と思われる。その姿は市のホームページに掲載されている想像図のようだったのだろう。

横浜の自宅から 1 時間強で市庁舎の駐車場に到着する。そしていつものように、市庁舎の一階に設置してある七重塔の模型を見る。それから市庁舎に隣接する国分寺に向かい、七重塔の礎石のある場所に行って七重塔の姿を思い巡らすことにする。

この日は早朝のためか国分寺台周辺の人影はまばらである。

七重塔の礎石

しかし七重塔の礎石付近に近づくとここだけは人だかりがしている。それにパトカーと警察官、それに野次馬が集まっている。そのうちの一人に話を聞くと、男性の死体が発見されたとのことだ。それ以上は分からず、いつものように徒歩で遺跡巡りに向かった。

翌日の朝刊やテレビのニュースで分かったことは、遺体の発見者は周辺の国分寺台団地の主婦である。ここらが愛犬の朝の散歩道なのだ。礎石の周辺は夏の間は雑草が生い茂り、礎石の周辺はすっかり雑草に覆われていて、この付近が愛犬のトイレなので、いつものように生い茂っている草むらに入って行ったが、突然吠え始めた。そこに初老の男が倒れていたのだ。驚いて警察に通報し、警官が

駆け付け、免許証により被害者は千葉市在住で千葉市の埋蔵文化財調査センターの発掘調査補助員五井恭一と判明した。

後で判ったことだが、死亡時刻は昨夜の 23 時ごろと判明した。死因は礎石に頭を打ち付けたことによる頭蓋骨骨折による脳内出血と判明。犯人は失神した被害者を死亡したものと思い,犯行の発見を少しでも遅らせるために草むらの中に被害者を移動させたのであろう。財布やスマホは残っていたが、カバンが紛失していた。近くのコンビニの防犯カメラにカバンを持った被害者の姿が映っていたのだ。カバンに何が入っていたかは分からなかったし、またカバンだけ持ち去った理由は分からなかったが、その中身が犯人にとって重要なものだったのであろう。警察は強盗の線も視野に入れ、広範囲に捜査した。しかし行きずりの殺人も想定して、周辺の防犯カメラを調査したが、犯人らしい人物は見あたらなかった。目撃者もいないし、防犯カメラに映らないように国分寺の境内を逃走したものと推測された。

怨恨も想定されるので、仕事関係や知人をあたったが、犯人らしい人物は浮かび上がらなかった。疑わしい人物は全てそのアリバイが証明された。千葉市の埋蔵文化財調査センターの遺跡発掘補助員が何故、上総国分寺を訪れていたのかは家族にも分からなかった。千葉市以外の遺跡にも興味があり、趣味で訪れたのだろうと、県警は簡単に考えたようだ。

5 年経ち、事件は迷宮入りしたかのようで、人々の事件に関する記憶も薄れてしまっていた。

2027 年 6 月、65 歳で定年を迎えた私は久しぶりに東京で開催される高校の同窓会に顔を出した。そこで栗栖庸介に会った。彼はひとまわり年下の 53 歳で、社会学専攻の大学教授だ。初対面だが、趣味が古代史と分かり、共通の趣味の話題で話が弾んだ。不思議と馬が合うように思われた。後日，再会を約束し、名刺の交換をした。私もプライベート用の名刺を作っていたのだ。会合に出席したとき等に名刺があると便利だからだ。

そして約 1 カ月後に東京駅近傍のオアゾのレストランで会食した。高校時代の思い出話の後、古代史について意見を交換した。彼は古代史についてもかなりの博識であった。私は酒の勢いを借りてまくしたてた。〖『漢委奴国王印』の真贋論争が江戸時代から続き、今なお激しく行われているようだが、私は贋作ではないと思っている。

発見場所が志賀島だったのが謎であり、金印の発見者や鑑定者にも謎がある。贋作論者も随分いるようだが、近年になって、非破壊式の蛍光Ｘ線分析で金印の組成が分析され、金約 95%、銀 5%弱とやっと分かった。それは中国で発掘された同時期（1 世紀）の金製品の組成とほぼ一致していることが分かっている。江戸時代に、１寸のサイズの金印を偽造するのは確かに可能だが、江戸時代の人々が紀元 1 世紀ごろの後漢時代の金素材の組成を知り得たはずがないし、また江戸時代の市場にある金の純度は 80％以下なので、その純度の金が入手できたはずがない。唯一金箔の組成はそれに近いようだが、大量の高価な金箔でわざわざ偽造するだろうか？また入手できただろうか？もし、金箔を使用できたとしても、捜査して判らないはずがない。贋作者が金印の組成を知る得る方法も無かったし、拘る必要も無かったはずである。贋作論者は、江戸時代の人が金印の組成が 95％であるべきことをどうして知り得たのか、どうしてこだわったのか、そしてその純度の金素材をどのようにして入手したのかについて、説得力のある説明が必要なはずだが、それについて一切触れていないし、専門家の中で議論していないのが不思議だ。偽造の方法や字体、文字の刻印方法については議論され、諸説あるようだ。』と自説を述べたが、彼はただ笑っているだけで黙って聞いていた。

また『私は邪馬台国が畿内にあったと思う。魏志倭人伝の東の方角を南と誤認したことは間違いがない。誤認した理由は説明できる。羅針盤も無く、天文学も発達していなかった。それに倭国に地図が無かった。当時の中国の人々は日本列島の形状が分からなかったので、到着する松羅国（福岡）辺りが中国から最も近く、どこに行くにしてもそこからは遠ざかるのでいずれも南方向に進むものと誤解したのだろう。倭国内の全ての方角を 75～90 度ほど修正すれば、九州内の国々の位置関係や邪馬台国が畿内にあったことに合致する。中国から松羅国までの方角はほぼ正しいが、倭国内の方角を誤認している。

それよりも、もっと問題なのは倭人伝の中に

『**「王国の東、海を渡ること千余里、また国があってみな倭種である。また、侏儒国（しゅじゅこく）はその（女王国の）南にある。人の背丈は三、四尺（72 センチ、96 センチ）で、女王国を去ること四千里。また裸国と黒歯国があり、またその（女王国の）東南にある。船で一年ほど行くと着くことができる。**」とあるが、専門家の間では、侏儒国、裸国・黒歯国が架空の話であるということは定説のようだ。しかし前段の倭種の国の記述は事実だろうとされているが、この項目の文章すべてが架空であると解釈すべきであろう。侏儒国、裸国・黒歯国は遥か遠方にありながら、国名を明記している。しかしながらわずか千余里の倭種の国としながら国名が記述されていない。それに魏志倭人伝の前半では 30 数か国の倭種の国名を明記していながら、この項目の『倭種の国』の国名だけが書かれ

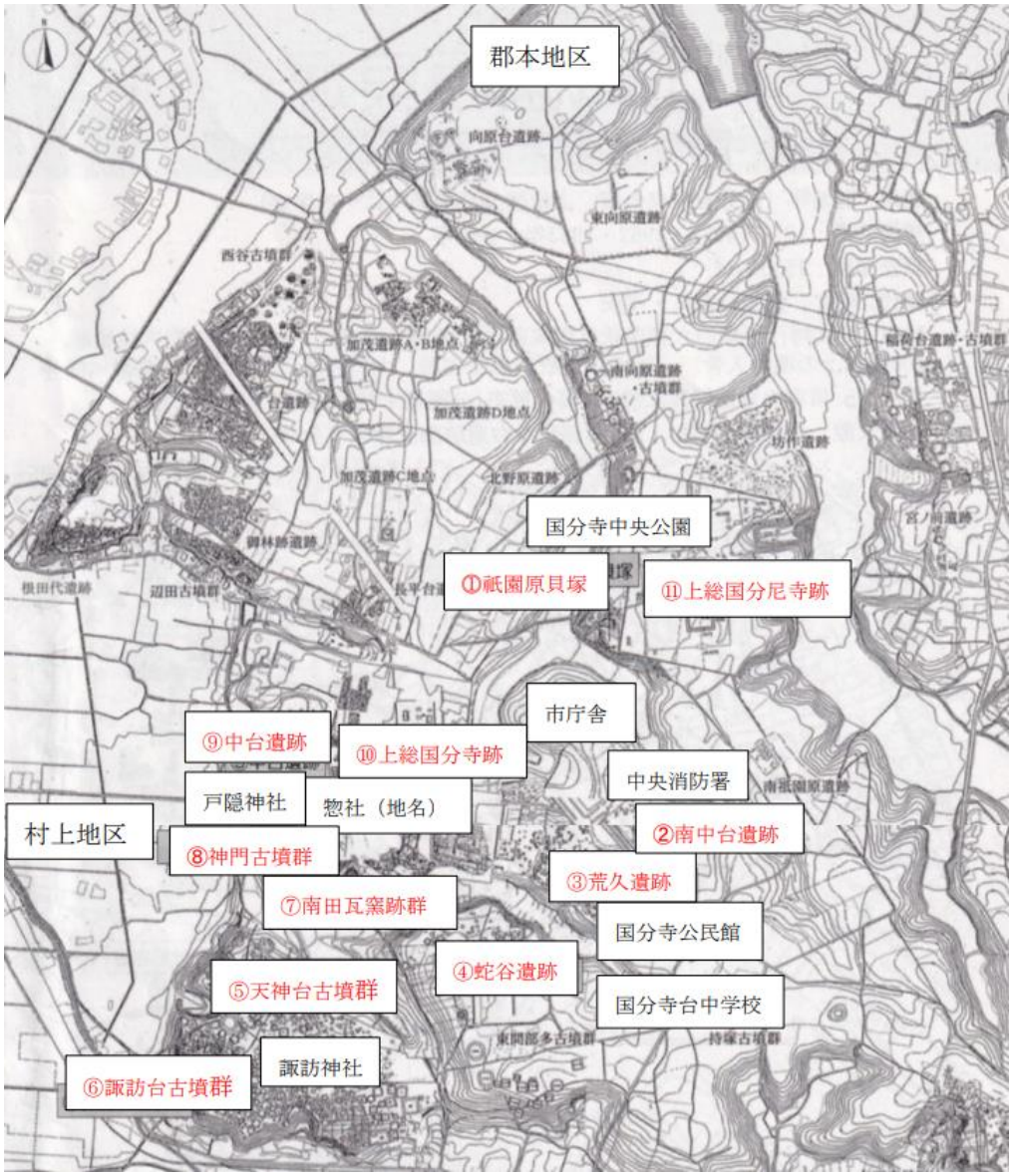
ていないのは辻褄が合わない。この項目だけは倭について書かれている他の記述とは異なる箇所に書かれており、不自然である。魏志倭人伝の作者は基本的には魏の使者の記録をベースにしているのだろうが、他の史料も併用したと思われる。東南アジアの他の国に関する記述を倭国と思い、追記したのであろう。遥か遠方の倭種の国の侏儒国、裸国や黒歯国の間に倭種の国が全く無いのは説得力に乏しいので、その間に名前が知れないが倭種の国々もあったと作者が付け加えたと解釈するのが妥当であろう。が、九州説論者は九州に邪馬台国があったのだから、その東に海を渡ること千余里にあるという『倭種の国』は四国の倭国が該当するのだから、邪馬台国は九州にあったと主張する。さらに畿内説の場合は南方向でも東方向にも該当する海を渡ること千余里の『倭種の国』が無いことを論拠にして畿内説を一蹴しているようだ。このことで畿内説論者も苦戦しているようだ。いずれもこの倭種の国が架空であるとの議論はしていないようだ。不思議である。また九州説論者は伊那国（福岡）の南に邪馬台国があるとの記述は正しいので、畿内説の方角・南を東に読み替えるのは認められないとしながらも、九州内の国々の位置を記述の方角に合うように場所に変えて解釈している。魏志倭人伝に書かれた距離や日数を記述通りとすれば邪馬台国がはるか南の海上になってしまうので、距離や日数を都合の良いように読みかえて九州内にあるように辻褄合わせをしている。例えば一月を一日の間違いとしているが、このように何でも都合の良いように読み替えるくらいなら、魏志倭人伝は全て架空なので、事実と信じるに値しないと言う方がましである。邪馬台国関係の専門書を読めば読むほど、九州説の専門家の中には学問的ではなく、結論が先にありきで、それに都合の悪いものは無視し、九州説に都合のよいように読み替えているように感じることがあるので、邪馬台国関係の専門書を読むのが億劫になっている。』と素人なので誤解があっても許してくれるだろうと勝手に決めこみ、遠慮なくまくしたてると、笑みを浮べながら、黙って聞いていた。同意もしかねるが、あながち否定も出来ないということだろうか？

ついでに 5 年前の上総国分寺の殺人事件の話を出して「未解決のままのようだ。私も偶然、事件現場に遭遇したので気になっている。何とかならないだろうか？」と言うと「被害者は国分寺台のどの遺跡をどのような頻度で訪れたのだろうか？訪れた目的は何だったのか？それに遺跡巡りが趣味であるなら、市原の国分寺台以外の遺跡はどこを訪れたのだろうか？」とつぶやいた。

別れ際に一度国分寺台遺跡を案内して欲しいと興味を示した。そのときは国分寺台遺跡群の興味を持ったのか、事件に興味を持ったのか、その両方なのかは分からなかった。

① 祇園原貝塚（ぎおんばらかいづか、国分寺中央公園）
② 南中台遺跡（みなみなこんだいいせき、中央消防署前）

③ 荒久遺跡（あらくいせき、国分寺公民館）
④ 蛇谷遺跡（へびやついせき、国分寺台中学校）
⑤ 天神台遺跡（てんじんだいいせき、諏訪神社）
⑥ 諏訪台古墳群（すわだいこふんぐん、諏訪神社）
⑦ 南田瓦窯跡群（みなみたがようあとぐん）
⑧ 神門古墳群（ごうどこふんぐん）
⑨ 中台遺跡（なかでいせき）
⑩ 上総国分寺跡（かずさこくぶんじあと）
⑪ 上総国分尼寺跡展示館（かずさこくぶんにじあとてんじかん）



JR 内房線五井駅で彼をピックアップして更級通を経て東側方向にある国分寺台に向かった。更級通は『更級日記』を記念して名付けた通りだ。『更級日記』の作者・菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ）が 13 歳のときに、父親・菅原孝標が上総国司の任務を終え、一家が京に向けて出発する門出から、51 歳過ぎまでの出来事をまとめた回想録である。52 歳ごろにまとめ書きしたとされているが、作者は記憶に頼っただけでなく、その時々のメモはあって、それを日記に活用したとされている。確かに、記憶だけでほぼ 40 年前の上総から京までの紀行文を書けないはずだ。不明な地名や明らかに間違っている地名がある。13 歳の時なので、その時点での誤解や聞き間違いがあっても当然だが、決して 40 年後に思い出せるものではない。

市庁舎の駐車場に駐車して、市庁舎の一階にある七重塔の模型を見る。さらに遺跡群に関する手持ち資料（講座で入手した資料とネットで検索した「市原の国分寺台遺跡群」のコピー）を渡して、隣接する国分寺の境内の七重塔の礎石に案内する。事件現場だ。国分寺の境内を経由して、国分寺台の遺跡群を散策した。

現在の上総国分寺

☛ 発掘された西門の柱の位置

途中、栗栖庸介が『上総国府祭』のポスターを見て、「国府はどこにあるのですか？」と質問してきた。

国府の所在地はまだ特定されていない。手持ち資料で村上説，郡本説，市原説、能満説の 4 候補地の位置を説明し、諸説あるので、それぞれの候補地に関する資料は後日、送付すると約束した。後日、図書の「まぼろしの上総国府を探して」とネットで検索した「上総国府はどこ？」、「上総国府はいずこ？」のコピーを郵送した。

奈良・平安時代の市原と上総国府候補地

正月明けに栗栖庸介から、国分寺台遺跡群の案内と資料提供の御礼に食事に招待したいと誘いがあり、丸の内のオアゾのレストランで会食した。彼からお礼の言葉があった後、「実は自分にはよくは分からないのですが、人から見れば類稀な記憶力と洞察力があるそうです。それらを評価されてのことでしょうが、警視庁の難事件の捜査に協力して、事件解決に貢献したことがあります。それで警察関係の知人もいて、それにたまたま千葉県警の刑事局長が大学の同期の友人であり、彼は私が難事件で警視庁に協力していることも知っています。国分寺の事件の経過や見通しを問い合わせてみたところ、迷宮入り寸前であることが分かりました。事件解決に協力することを条件に情報を入手しました。」との話だった。

彼の市原国分寺台訪問の主目的は殺人事件だったのだ。事件解決のヒントはこの遺跡群にあると思い、まず被害者の市原市の遺跡群での足取りを追って、被害者のここでの特別な目的の有無を探ろうとしたのだ。

県警の情報は

① 死因は礎石に頭部を打ち付けたことによる頭蓋骨骨折による脳内出血で即死ではなかった。損傷を受けたときに意識を失って、その後脳内出血により死亡したのだろう。犯行時刻を特定するのは難しい。犯人と争った痕跡はあったが犯人を特定するような有力な物証は見つからなかった。カバ

ンは紛失していたが、財布は残されていたので、強盗目的ではなく、また行きずりの犯行とも思えない。被害者の仕事関係や交友関係をあたったが、いずれもアリバイがあり、犯人らしき人物が浮かび上がってこない状況である。すっかり暗礁に乗り上げてしまっている。

② 被害者の家族からの情報として、被害者が市原の国分寺台には足繁く訪ずれていたことが分かった。その目的は家族も聞いていないが、仕事の関係もあり、趣味で国分寺台遺跡を訪ずれているのだろうと思っていた。しかし他の遺跡にはほとんど訪問したことがないことが分かった。不思議である。

③ 地元のボランテイア組織のガイドから、被害者によく似た人物から国分寺台遺跡の案内を頼まれたことがあるとの情報提供を得た。ガイドに面談し、被害者と同一人物と分かった。被害者が国府の候補地に格別の興味を持っていたことも判明した。

栗栖庸介は、犯人が仕事関係や交友関係ではないとして、犯人像を国分寺台で面識のある人物に絞ったようだ。被害者の国分寺台での足取りを辿り、国分寺台で何を探っていたのかを調べることにした。庸介は東京在住で、自分の車を持っていないので、私が足になることにした。川崎駅で待ち合わせ、アクアライン経由で国分寺台を訪れた。

被害者が上総国府に拘っていたようなので、まず市原市歴史博物館にある埋蔵文化財調査センターを訪問し、国府に関する教えを乞うた。応対してくれたのはふるさと文化課の東里子学芸員で、30 歳前後のなかなかの美形である。後に埋蔵文化財調査センター主催の講座で東学芸員の講演を聴講することになったが、そのときに彼女の卒論のテーマが「市原国分寺台遺跡群」で、在学中に古文の読み方をマスターしていたことを知った。

話がそれるが、千葉県立文書館主催の「古文書を読み解く」という講座に 5 回ほど参加したことがあるが、とても解読できなかった。早く書くために草書で書かれていてとても読みにくい。字体を相当くずしていて、よく似た文字があり、跳ね方の違いが少しあるそうだが、その識別がなかなかできないのだ。同年配の女性が古語辞典を引きながら、読み進むのを見て感心したものだ。その後コロナ禍の影響でその講座がなくなってしまったが。

東里子学芸員から

「国府の候補地の資料は提供します。その一部は団地等の造成に絡み、発掘されたものがありますが、そのような工事が無ければ発掘出来ないように法律で決まっているのです。発掘された遺跡だけでは、国府の所在地を特定できるようなものは見つかっていないのです。ただ、市原地区で基壇に使用した石材が発掘さ

れました。基壇とは建物への水の浸入を防ぐため、水はけを良くするために平地の上に石を組み、高くした部分です。国庁、神社仏閣のような大型建物に使用されます。市原辺りだと神社仏閣があったという記録がないので、ここに国庁があったのではないかと騒ぐ人たちもいますが、まだ何も確認されていないです。」と説明を受けた。

復元された上総国分尼寺の金堂の基壇（金堂再建の計画はあるそうだ）

国府に関心があるならと提供資料以外に国府関連の資料リストを紹介してくれた。また、翌月に開催される市原国分寺台遺跡の講座を紹介してくれた。庸介は仕事があって行けないので、私が聴講して栗栖庸介に報告することにした。

せっかく来たので、光善寺に行くことにした。奈良時代に建立された光善寺廃寺跡に建立された寺だ。能満説の場合、光善寺廃寺が惣社だったのではないかと言う説もある。

惣社は必ず国府の近くに建立された。全国に惣社の地名が残っている。

現在はご住職もいないようだ。この寺の裏で奈良時代の瓦が多く発掘され、寺だけでなく国庁（政庁）があったのではないかとの説もあるようだ。しかし、光善寺廃寺の瓦かも知れないし、この周辺には国府に相応しい広さ（およそ 200 メートル四方）の平地もなさそうだと思った。現在は何の面影も無い。庸介はじっと見ていただけで何も語らなかった。

光善寺薬師堂

さらに被害者・五井恭一を案内したというボランテイアガイドに会ってみた。遺跡を案内しただけで被害者・五井恭一について特段の印象はなかったそうだ。ただ上総国府について何か知りたがっていたようだったと分かった。

翌月、市原埋蔵文化財センターの講座の聴講するために市原に向かった。講師は東里子さんだ。事前に入手していた資料と重なる内容だったが私の理解は深まった。庸介に電話で報告し、後日簡単にまとめてメールを送った。庸介のすごいのは、電話で聞いた内容をほぼ記憶し、必要により、文章にして再現できることだ。私のまとめたメモはほとんど必要ないようなのだ。

埋蔵文化財調査センターに「加賀美幸子氏による『更級日記」の魅力』というポスターが張られてあった。

市原市では 2020 年（作者が門出したのが 1020 年で、その千年後を記念して）コロナ禍の影響で実際には 2021 年に延期されたそうだ）に「更級日記千年紀」の記念行事を開催していて、その後毎年「更級日記千年紀文学賞」を開催し、原稿を募集して優秀者を表彰している。選考委員長が椎名誠氏だ。記念講演もあるようで、今年の講師が加賀美氏だ。選考委員にも入っている。個人的に『更級日記』に興味があるので、聴講を申し込んだ。

後日、市原市市民会館での講演会に参加して、講師より「更級日記」の「継母なりし人」とかのいくつかの原文のコピーをもらい、説明を受けたが、更級日記の予備知識が少なったため理解不足だった。ただ、講師が「日記の作者の菅原孝標女が仏師だったのを知っていますか？仏師だったのですよ」と説明したので驚いた。後で、調べると確かに「**等身に薬師仏をつくりて**、あらひなどして、人まにみそかに入りつゝ、「京にとく上げ給ひて、物語のおほく候ふなる、あるかぎり見せ給へ」と、身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。」と日記にある。確かに薬師仏を作ってもらったということではない。この薬師仏は残っていないとされているが、菅原孝標女が仏師だったということに驚いた。

話がそれるが、作者・孝標女は『源氏物語』を読みふけり、物語世界に憧憬しながら少女時代を過ごし、そして自らも源氏物語のような世界に身を置くことに憧れたようだ。母方の伯母が『蜻蛉日記』の作者の藤原道綱の母（太政大臣・藤原兼家の第 2 夫人で、道長の義母）で、本朝三美人の一人と云われた方なので、姪の孝標女も相当の美形だったと思われる。彩色兼備だったのだ。孝標女はその自覚もあり自分が伯母と近い境遇にあり、自分も伯母のようになれると思い、憧れたのかもしれない。藤原家の子女の伯母と菅原家の子女とでは条件が大きく異なるようだが、孝標女はそのように思わなかったのかもしれない。結果、夢はかなわなかった。が、

源氏物語への少女時代の想像を超える強いあこがれと執着を感じ取ることができる。薬師仏を一心不乱に作り、そして祈った姿が浮かび上がってくる。

後日、庸介と今後の予定を確認するときに、ついでに「菅原孝標女の仏師説」を知らせた。そのとき庸介より、光善寺を訪問するようにと依頼された。庸介は国司の子女が作った薬師仏なら、そう簡単には廃棄されずに、どこかに保存されているのではないかとふと思い、光善寺も候補だと思ったようだ。

翌日、一人で光善寺に向かった。今回はご住職に会うつもりだ。住職が常駐していないが、近所で、住職の家を教えてもらった。幸い在宅しておられたので、国司にまつわる話、または遺跡物が残っていないか聞いてみたが、何もないとのことだ。「寺は何度か建立を繰り返した。檀家で先祖代々名主を勤めた市原泰三氏を紹介しても良い。何も分からないと思うが、紹介するので行ってみたらどうか」といわれ、ダメ元で行ってみた。

市原泰三さんの家はすぐに分かった。幸いご在宅だった。「国司やその家族にまつわる話も知らないし、まして遺物などは何も残されていない。土蔵にガラクタしかないが、必要と思うなら蔵を見てもらってもよい。以前、『お宝鑑定団』に出そうと思って蔵でお宝になりそうなものを探したことがあったが、目ぼしいものはなかった。価値のあるものはすでに先祖が有効に活用してしまったのだろう。蔵に残っている物はガラクタばかりである。何か欲しいものがあったら、持って行ってもよい」と言われた。

それで蔵に入ってみたが、確かにガラクタばかりのようだ。その中に丸太が転がっていた。全体にくすんでいて、表面は分かりにくいが、うっすらと仏の顔が描かれているようにも見える。市原さんに、「これは何でしょう」と質問すると、「よくは分からない。ガラクタだと思いながら、出来の悪い仏像のようにも見えるので、処分するとバチが当たるようにも思われ、先祖代々誰も処分しなかったのでしょう。そういえば、数年前に来た人に、同じように蔵を見せたのを思い出した。何かお探しのようなので、関係があるかどうか分からないが、必要ならその人の名刺をお見せします。名刺は残っていると思います。」と言って探しに行った。持ってきた名刺を見て驚いた。被害者・五井恭一だった。その名刺に書き込まれた日にちは殺人事件のあった日なのでさらに驚いた。市原さんは訪問者に名刺を貰うとファイルするようだ。しかもその日にちを書き込む習慣があったのだ。

その場で庸介に電話で報告した。庸介も大変驚き、蔵の中に他に何か目ぼしい物が無いか調べて欲しいと言い出した。何度も調べたが、目ぼしいものは何も見当たらなかった。

その翌日は休日だったので、庸介と一緒に市原さんの家に向かった。庸介が丸太を調べ始めた。丸太の端面（木像なら底）にかすかな傷を見つけた。小刀でこ

じ開けると木片が外れ、中に空洞があった。何も入っていなかった。庸介は「この丸太は菅原孝標女の作ったという薬師仏で、この空洞にあった何かを被害者が持ち出したのかもしれない。そしてそれを犯人が持ち去ったのかもしれない。それなら恐らく菅原孝標女の書いたメモだろう。それに国府所在地のヒントが書かれているとすれば、非常に価値のある歴史的史料であろう。よくは分からないが 1 千万円以上の価値があるのかもしれない。被害者と犯人との接点が分からないが、名刺に書かれた日は殺人が行われた日なので、犯人は被害者と面識があり、何かを感じて被害者を尾行して犯行に繋がったのだろう。とすれば恐らく犯人像は上総国府遺跡の愛好家で、遺跡を大切にする人物に違いない。例えば被害者が発見した遺物を公表しなくて、売りさばく意向を示せば、それはとても許し難くて阻止しようとしたに違いない。結局は争いになって、殺人事件に発展してしまったのであろうと推測できる。その史料を発見することが犯人を特定することになる。」と。

このことを県警に連絡したら、翌日から県警は総力を挙げて事件の日に被害者と接点の会った人物を捜索し始めた。遺跡関係者にあたったが、5 年以上前の話であり、新たな情報は得られなかった。残されていたコンビニの防犯カメラの映像をチェックしたら、被害者・五井恭一の背面から五井をちらちらと見ているような男の様子が映っていた。たまたま見ただけとも受け取れるが、何らかの面識があると判断された。男について調べた結果、国分寺周辺の団地の住人で遺跡の愛好家・戸村健二と分かった。犯人とすれば犯行現場からの逃走も容易だっただろうし、目撃情報にもかからないはずだ。ボランティアガイドや遺跡関係者らにあたって、戸村健二と五井恭一の接点を探ったが目ぼしい証言は得られなかった。数日後、ボランティアガイドから、「遺跡を案内するときにはいつもお客さんの記念撮影をしている。それらの写真をチェックしたら、そのうちの 1 枚に並んだお客さんの後方に五井恭一と戸村健二が会話しているように見える写真が見つかったと県警に届けがあった。二人は面識があったのだ。

県警は戸村健二を任意同行し、写真を見せたが、「五井恭一氏と面識はありません。会話したかもしれないが、何か質問されたのかもしれません。それ以上の記憶はありません。コンビニではどこかで会ったような気がして五井恭一氏を見たのかもしれませんが、誰か思い出せなかったのではないでしょうか。このときの記憶はありません。国分寺の殺人事件にはかかわっていないし、その時間帯は自宅でパソコン操作をしていました。」と全面否認する。物証がないことを知っているからであろう。そればかりか、「菅原孝標女の残した史料なんて知らないし、仮にそのようなものがあったとして、それを所持していたとなれば、それこそ殺人事件の証拠物件になる可能性があるので、自分なら焼却処分してしま

いますよ。」と言う。ここまで言うのであれば、家を強制捜査しても史料は見つからないだろうと諦めかけた。

庸介は「史料発見が犯行の裏付けの物証につながるだろう。国分寺台遺跡群をこよなく愛する人物が歴史的大発見の史料を安易に焼却するはずがない。歴史上から埋もれさせてしまうはずがない。国分寺台の遺跡群に隠し、誰かに発見させようとしたのではないか？」と言う。さらに「地上に遺跡の痕跡が無いようなところに埋めたら、二度と発見されるかどうか分からない。比較的に発見し易いと思われる遺跡に隠したのではないか？国分寺遺跡群の中で遺跡物として遺っているところは限られている。そこをくまなく調べることだ。」と。

県警が総力を挙げて捜索した結果、国分寺境内にある「将門塔」（まさかどとう）の裏側に埋められた石作りの箱の中から、史料が発見された。栗栖庸介の推理は正しかったのだ。

「将門塔」は市民には「将門の墓」として親しまれ、よく知られている。

市の資料には

「【市原市指定文化財】将門塔は、もと菊間親皇塚（しんのうづか）古墳の墳丘上に存在し、「将門の墓」として伝承されてきた。しかし、塔身には応安第五壬子十二月三日の銘が刻まれ、将門の命日、天慶三年二月十四日と違い、さらに塔の型式も南北朝時代と考えられ、将門と結び付く点はない」とある。

このことを犯人が知っていたかどうかは分からない。

将門塔

戸村健二は自分が捜査線上に浮かぶとは思っていなかったのだろうが、さすがに史料に指紋は残されていなかった。が、わずかな付着物からＤＮＡが検出され、戸村のものと一致したのだ。物証を突きつけると戸村は自供を始めた。

戸村健二の供述。

【若い頃より、遺跡巡りが趣味だった。転勤で市原に引っ越してきてからは国分寺台遺跡を主に巡った。2年前に定年を迎え、国分寺台の遺跡巡りの頻度が増えた頃、偶然国分尼寺で被害者の五井恭一氏に会った。その後、たまたま会うことが増えてきて、話をするようになった。そのうち、いつだったか五井恭一氏が「お宝が見つかれば、一儲けができるのに」とつぶやいたので、自分は金儲けではなく純粋に遺跡を愛好しているので、五井恭一氏のつぶやきを聞いてから嫌気がさしてきて、その後は出くわしても話しかけないようにしていた。事件当日、偶然コンビニで五井恭一氏を見かけた。その時の多少うわついたような五井恭一氏の様子が気になり、あとをつけたら、市原家に向かった。市原家の土蔵から出てきた五井恭一氏が妙に浮き浮きしていたので、偶然をよそおって話しかけた。すると五井恭一氏が「ついにお宝を見つけた。これで一儲けできる。菅原孝標女の書いたメモが見つかったのだ。上総時代の生活に触れていて、国府の位置の特定につながる。本物と判断できることも記述されている。相当に価値のある歴史的史料なので高く売れるだろう。」と。私が「それは市原泰三さんの持ち物なので返すべきである。」と言うと、五井恭一氏が「市原さんから、蔵の中はガラクタばかりだが欲しいものは何でも持って行って良いと了解を得ている。」と。それで私が「それは上総国府の特定につながる歴史的大発見であり、市原市の宝でもあり国の宝である。公表して、公共機関に寄贈すべきである。」と数時間かけて何度も説得を繰り返しましたが、説得に応じませんでした。帰ろうとする彼を引きとめているうちに、もみ合いになって、勢いあまって礎石に倒れ込みました。気が付いたら、彼が息をしていませんでした。気が動転しながらもメモの入ったカバンだけはと思い、持ち帰りました。落ちついて考えれば、彼が史料を売れば、やがて公表され、国府の所在地は明らかになるのでそれでもよかったのかもしれないのですが、その時には許せない気持ちでいっぱいでした。取返しのつかないことをしてしまいました。被害者の家族にはまことに申しわけないことをしました。自分の家族にはとてつもなく迷惑をかけてしまいました。

　メモには父親の名前や当時の地名も書かれていて、本物であることは疑う余地のない歴史的史料と思いました。史料は公にすべきと思いましたが、自分が介在すると事件の証拠になってしまうので、誰かに偶然に見つけて欲しいと思い、遺跡群の中で比較的に目立つと思われる将門塔に埋めました。「将門の墓」でないことは知っていましたが、その時は気が動転していて、そのことは失念していました。菅原孝標女と将門とは時代が違い、何の縁も無いのですが、とにかく、少しでも早く史料を発見して欲しかったのです。そのうちに移し変えても良いとも考えましたが、適当な場所も思いつかず、そのままになったのです。もし、いつまでも発見されない場合は、危険を冒してでも史料を公にするほかの手段を講じるつもりでした。

五井恭一氏がどのようにして、あの史料にたどりついたのかは聞いていないです。『更級日記』に上総での生活、国府にまつわることを菅原孝標女が書いていてくれれば、国府の所在地論争をしなくてもよかったのにと残念に思っている地元の遺跡愛好家は多いのです。五井恭一氏は、ひょっとしたら菅原孝標女の上総時代に関するメモが残っているかもしれない。それを見つけることができれば金儲けができると期待し、手当たり次第に探っているうちに偶然に行きついたのではないでしょうか？】

五井恭一がどのようにしてメモを探り当てたのかは謎として残るが、仕方がない。

史料は警察が証拠物件として押収し、とりあえず、そのコピーを市原市埋蔵財調査センターに渡した。国府や国司館に関する記述もあったらしいので、間もなく菅原孝標女の史料の内容が公開され、やがて国府の所在地も解明され、その価値がも証明されるでしょう。

恐らくであるが、菅原孝標女は丸太を切ってもらって、それに顔を小刀で刻むとか、墨で描いて薬師仏としていたのだろう。端面に隠し穴があり、木片でふさがれていた。恐らく従者に作ってもらったのだろう。その中に上総での生活を書いたメモを仏の隠し穴（胎内）に入れ、早く京に戻れるような願いを込めてお祈りしていたのでしょう。

親の目には、子どもがガラクタのような丸太で仏様ごっこをしているとしか映らず、京の都に帰るときには、「そんなもの、捨てていきなさい」となったと思われる。が、菅原孝標女の熱意を知っていた菅原家の従者が光善寺に薬師仏として納めたが、仏は素人の手によるものなので、とても薬師堂で一般に公開されるようなものではないので、処置に困り土蔵に入れていた。寺の再建や修繕をするとき時に檀家である名主に預けたのだろう。結果、名主の土蔵に眠っていたままだったのだろう。名主の子孫は初めのうちは、光善寺から預かったことは知っていたが、いつからか、何であるかも分らなくなったのであろう。得体が知れないが仏のような木像でもあるので、処分されることもなく今日まで残ったのだろう。

いずれ市原市埋蔵文化財調査センター等により、菅原孝標女の史料が発表され、また国府の所在地も解明され、これらにまつわる研究成果が続々と発表されるだろう。その時には講演も開催されるだろうから、聴講するつもりだ。学芸員の東里子さんに史料や国府関連の裏話を聞けるかもしれない。楽しみだ。

以上